

樹木とキノコ 進化中の変ったキノコ「腹菌類」

—キノコの女王「キヌガサタケ」—

投稿：宮井 正彦

埼玉県では準絶滅危惧種（NT）のカテゴリーの「キヌガサタケ」が、今年は、長梅雨の為に各地で見られた。「キノコの女王」と云われる通り、気品のある佇まいであるが、鼻にツーンとくる悪臭を放っている。キノコ狂の友人によれば、この竹林には「キヌガサタケ」があると遠くから判るそうだ。発生は初夏の梅雨時が多いが、秋梅雨の頃も発生する。

「キヌガサタケ *Dictyophora indusiae*」スッポンタケ目スッポンタケ科キヌガサタケ属に属するキノコであるがスッポンタケ属とする考え方もある。

一般的には竹林（モウソウチク・マタケ）に発生するが、写真は雑木林に発生したもの。

「キノコの女王」の風格があります。



*2019.7/6 埼玉県内 幼菌

**早朝

***午前10時頃（雑木林内）撮影

過去には、腹菌類は一般のキノコが進化したグループとして、腹菌綱の扱いであった。DNAを用いた分子系統学の発達により、このグループは多系統であることが判り、学術的には、腹菌綱は解体され、ハラタケ綱に所属し、スッポンタケ目、ハラタケ目、イグチ目、エウロチウム目、ヒメツチグリ目、ホコリタケ目等に分類された。

腹菌類は、気象環境の変動（地球の異常気象（乾燥、や冷温等）への対応や昆虫等微生物との関わりにおいて、ハラタケ型から腹菌型への収斂進化を複数回起こしたと云われている。一般的きのこの場合は、子実層（胞子を造る担子器）を最初から露出しているもの（ヒ

ダナシタケ類)、最初は子実層が被膜に覆われているが、露出させてから胞子を成熟させるもの(ハラタケ型キノコ)であるが、腹菌類は胞子を形成する組織体は胞子を十分成熟させるまで殻皮(袋)に包みこんでいる。このグループは収斂進化そのもので、幼時地中生〜半地中生。胞子の放散においても自ら胞子を噴出するものもあれば、微生物や小動物を利用するものもあり、多様である。数回の収斂進化と共進化を繰り返し、奇妙な形態の種も多い。進化中の不安定さもあり絶滅に瀕している種もある。中には、子囊菌門であるにも関わらず、担子菌と間違えられた種もある。その幾つかを紹介してみたい。

*ハラタケ型⇒腹菌型へ進化途中?のキノコ **注) 担子菌ではなく子囊菌の収斂進化したキノコ



2015.3 提供吉永 潔氏 ニューゼーランド

2018.10/1 撮影 展示会にて「コウボウフデ」

***準絶滅危惧種 「カゴタケ」(グレバは果物臭)

****胞子を噴射「エリマキツチグリ」(頂口と円座)



2017.10/8 撮影 埼玉県

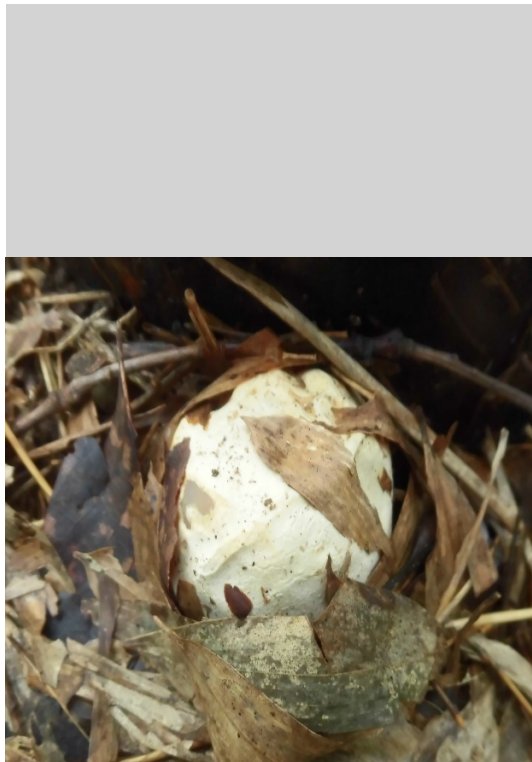
2017.9/10 撮影 茨城県

注釈); 「コウボウフデ」は担子菌門の腹菌類とされていましたが。しかし2004年に実は子囊菌門だということが判り、腹菌類から外れました。世紀の大きな分類移動でした。「腹菌類」は担子菌のキノコにしか使わ

ない表現です。やはり、子囊菌の中にも、同様に収斂進化し、安定した地中に潜り、胞子を成熟させ放散を動物・微生物に依存する種も誕生しています。「塊菌目」の「セイヨウショウロ（トリュフ）」等です。

追記：今年（2019）は、秋梅雨にも、孟宗竹林内で「**キヌガサタケ**」の発生がみられました。

2019.9/23 撮影 埼玉県内 幼菌



成菌



以上